

● 教科・領域 ●

心豊かに生き生きと活動する子を目指して 学び合うことを中心に

神奈川県 座間市立相武台東小学校（校長 金子憲勝）

- ① 校内研究の推進
学び合うことをとおして、温かな人間関係を築く
- ② 研修会の充実
良いインプットは、良いアウトプットを作りだす
- ③ 多様な異学年交流の実施
学年を超えた互恵関係を育む
- ④ 地域資源を活用した学習
地域の方々との学び合い
- ⑤ 掲示物の工夫
取り組みの視覚化を図る

はじめに

座間市は、東京から南西へ40km圏内で、横浜から西へ約20kmのところにあり、神奈川県のほぼ中央に位置している。市域は中央部を南北に縦断する座間丘陵を境として東部には相模原台地が、西部には相模川に沿った沖積低地が広がり、起伏に富んだ地形を構成している。本市は、都心に出やすくて自然が豊かだということもあり、大都市のベッドタウンとしての開発が進み、今日でも住宅の建築が進んでいる。

本校は、市の中で4校目に開校し、小田急線の相武台前駅から徒歩約10分の距離にあり、商店街の方々も学校教育に大変協力的である。全校児童610名の中規模校で、特別支援学級を含めて24学級である。2019年度には、創立50周年を迎えるので準備を進めている最中である。

I 研究の概要

1. 児童の実態と課題

本校は、ここ数年「聞く」ことを重視した研究を実践してきた。その結果、児童は朝会などの集まりの時には、しっかりと話を聞くことができており、来校された地域の方々からはお褒めの言葉をいただくことが多い。

また、教員に指示されたことは素直に行うことができ、与えられた仕事は責任を持って取り組むことができる。その半面、自ら考えて行動することが苦手な児童が多く、言われたことはできるが自ら考えて行動を起こすことが少ない。また、左に書いたとおり大都市のベッドタウンという土地柄、他市町村から転居してきた児童が多く、児童同士の人間関係作りに課題がある。

2. 研究主題設定の理由

学校教育目標は、「自ら考え、主体的に判断し、行動できる力を身につけたくましく心豊かな児童を育成する」である。

そして、重点目標として「自ら高め、共によりよく生きる子」を掲げ、自ら考え、主体的に判断し、行動できる力を身に付けた、たくましい心豊かな児童を育成することを目指している。

これらの目標を実現していくためには、温かな人間関係を築くことを根底にすえながら、双方向性の関わりの中で互恵関係を育み、その中の学びをとおして一人ひとりが豊かになったと実感させていくことが大切である。お互いの思いや考えを受け止め合って「学び合う」ことに視点をあてていくことで、自分では考えのつかないことに触れることができ、個々の考えに広がりや深まりが生まれ、心の豊かさにつながっていくのではないかと考え、「学び合う」ことを中心にすえた研究を行うこととした。

なお、この研究は教科に特化したものではなく、学校生活の全般に関する内容なので、総合的な学習の時間や特別活動の時間なども含まれている。

II 研究の内容

1. 校内研究の推進

「学び合う」を中心とした研究を行う上で最も重要なことは、単なる「学び合い」で終わってはいけないことである。「活動あって学びなし」では、児童のためにはならない。そこで、この研究を進めるために外部から講師を招き、校内研究会を計画的に行うこととした。

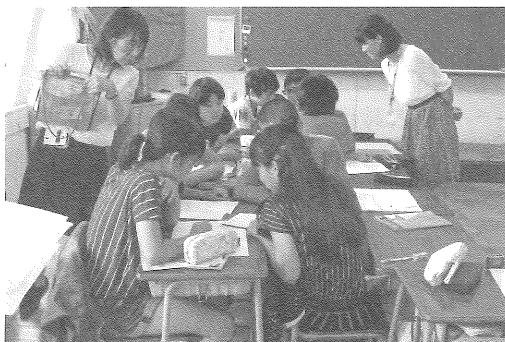
講師は、神奈川県の元県央教育事務所長

で現在は横浜国立大学教育人間科学部非常勤講師兼附属教育デザインセンター主任研究員である山本金五先生にお願いした。

山本先生には、年度当初に2020年の次期学習指導要領で求められている授業や「学び合う」ことに関する講演をしていただいた。その講演内容を基に、下表のとおり計画的に研究授業を行い、授業後に研究協議を重ねた。

【研究授業日と学年（教科）】

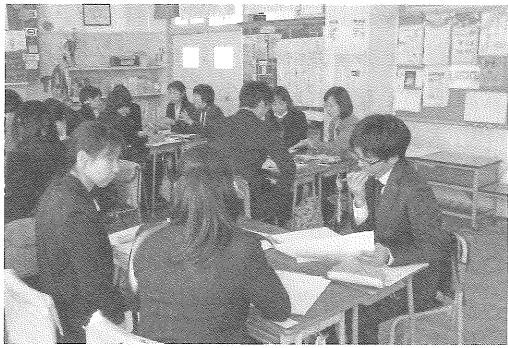
	月 日	学年（教科）
①	6月20日	6年生（算数）
②	6月26日	4年生（算数）
③	10月16日	2年生（算数）
④	10月30日	特別支援学級 (国語など)
⑤	11月20日	5年生（国語）
⑥	1月22日	1年生（国語）
⑦	1月29日	3年生（理科）



◆ 6年生の学び合う様子



◆ 1年生の学び合う様子（ペア学習）



◆ 研究協議（学び合う教員集団）

7回の研究授業と研究協議をとおして、以下のような意見がでた。

- (1) 「学び合い」とは、発表し合うことではなく、『つなげる』ことである。
- (2) 『あたたかな聞き方』『やさしい話し方』を育てることが、「学び合い」の土台になる。
- (3) 「学び合い」には、安心して意見を言い合うことのできる学級集団作りが欠かせない。
- (4) 「学び合い」をするためには、一人学びの時間を確保し、自分の考えを書きせる時になぜそう考えたのかについての理由や根拠を書きせることが大切である。
- (5) 「学び合い」を深めるためには、教員が児童に提示する学習課題が重要である。
- (6) 学習課題が、児童自身の問題になるように教員が働きかけることが必要である。本校では、児童自身の問題のことを学習問題と言っている。
(以下児童自身の問題のことと学習問題と明記する。)
- (7) 学習問題を解くうえで、一人で答えを求めることが難しい場面が多くあり、その時に「学び合い」が有効に

なる。

- (8) 授業の中での「学び合い」だけではなく、自分の考え方や気持ちを表現する日常的な場の設定が重要である。
 - (9) 分からない児童への手だてが少ないので、今まで以上に分からぬ児童への手だてを工夫する必要がある。
- など、多くの意見が出され、授業改善に繋がった。

「聞き方」「話し方」「学び合い」の掲示物を作成して各教室に貼り、児童の意識付けを行った。



◆ 教室の掲示物

↓

学び合い	
1	「分かりません」と言える
2	何が分からないのか言える
3	分かろうとして友だちにかかわる
4	おたがいに教えあいながら
5	よいところとちがいに気づく
6	友だちの考えを取り入れて自分の考えを持つ
7	教えあって分かったことをつなげる
8	自分のひろがりやふかまりを表現する

2. 研修会の充実

「良いインプットは、良いアウトプットを作りだす」ことを念頭に、教員の研修にも力を入れた。教員の思考が広がり豊かにならなければ、児童の思考が広がることは考えられず、まして心が豊かになることも考えにくい。そこで、多くの講師の方に来校いただき、研修会を実践した。

以下は、今年度行った研修会の一部で、これ以外にも多くの研修会を実施した。

講師名	研修内容
日本青少年育成協会認定教育コーチングS級トレーナー兼対話教育研究所代表取締役 小山 英樹	心豊かな児童を育成するための土台となる傾聴や承認について
文教大学 国際学部教授 赤坂 雅裕	道徳の教科化に向けて、授業で大切にすることや具体的な授業実践、評価について
東京学芸大学教授 粕谷 恭子	外国語と外国語活動の授業作りの考え方と具体的な授業内容、評価について

小山英樹先生の研修会は、ワークショップ形式の研修だったので、教員は意欲的に研修会に参加していた。教員として働くことの素晴らしさを再認識する内容で、教員の仕事に対する意欲が高まり、傾聴や承認の大切さを理解することができた。

小山先生には、遠方から来校していただいた甲斐のある素晴らしい研修会であった。

次に、来年度から道徳が教科化されることを受け、ここ数年計画的に研修を行い、教科化に向けた取り組みを行ってきた。

また、来年度からは5・6年生に外国語が、3・4年生に外国語活動が導入される。

4月以降、教員が自信を持って授業を行ううえで、大変価値ある研修であった。



◆ 研修会の様子

3. 多様な異学年交流の実施

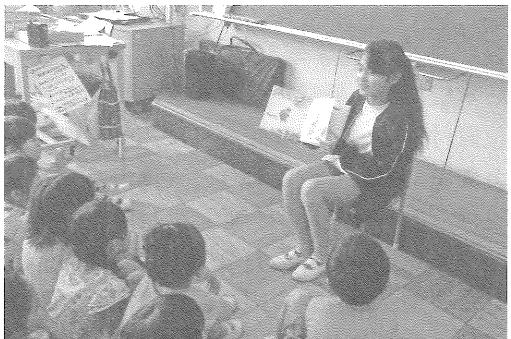
本校では、異学年交流も校内研究の柱に位置付けている。なぜならば、児童の実態と課題に明記したとおり、大都市のベッドタウンという土地柄、他市町村から転居してきた児童が多く、児童同士の人間関係作りに課題があり、意図的に児童同士の人間関係作りを進める必要性がある。そして、この異学年交流の中にも、上級生が一方的に下級生に指示を出すのではなく、「学び合う」ことを意識した取り組みを行った。

学年	交流内容
6年生 と 1年生	<ul style="list-style-type: none">・ 本の読み聞かせ・ 給食の配膳の手伝い・ 掃除のやり方の指導・ 休み時間の遊び など
4年生 と 2年生	<ul style="list-style-type: none">・ 鍵盤ハーモニカの練習の指導や援助・ 音楽発表会に向けての合唱練習の見学 など
5年生 と 3年生	<ul style="list-style-type: none">・ 国語の授業参観・ 総合的な学習発表会の参観 など
5年生 と 4年生	<ul style="list-style-type: none">・ 国語の時間に作った新聞発表 など

ここでは、6年生と1年生の交流、5年生と4年生の交流について報告する。

6年生と1年生の交流は、前表のように様々な形で行った。その中で、休み時間の遊びは年間をとおして継続して行うことができたので、1年生の児童が6年生に対して遊びたい内容などの自分の意見を自由に言うことができた。

そのため、6年生が1年生に一方的に指示するのではなく、お互いの考えを出し合うことができ、そのことが他の交流でも生きた。



◆ 6年生の本の読み聞かせ



◆ 6年生と1年生の交流の様子

次に、5年生が国語の時間に作成した「5年生で取り組むこと」に関する新聞を4年に発表し、4年生からの質問や感想に答える時間を作った。この交流は、初めての試みで、今年度授業における交流を実施し

たことにより、5年生は相手（4年生）を意識した発表をすることができた。

4年生からは多くの質問が出され、それについて5年生が考え、グループ内で相談したりする場面もあり、異学年交流をとおして学び合い、思考を深める場面も見受けられた。



◆ 5年生と4年生の交流（新聞発表）

交流を行った数日後に、4年生一人一人から5年生に対して、手紙が届いた。その手紙の中の二つを紹介する。

◎ すてきな新聞を発表してくれて、ありがとうございました。色々な新聞を読んでいると、5年生になるのが楽しみになりました。クラブや委員会に入る時の参考になりそうです。グラフやクイズを使って、見やすくしているところも、すごいと思いました。それぞれの新聞で、色々な工夫が見つけられました。4年生も、二学期に班で新聞を作ったのですが、5年生の新聞の方が、紙も大きいし、ていねいに書いてあり、内容がすばらしくておどろきました。5年生になったら、色々な行事を楽しみたいです。

◎ 新聞を書いてくださってありがとうございます。私はクラブのことで迷っていたので、5年生がクラブや委員会のことを新聞に書いてくださったのは、とてもうれしかったです。これで、どのクラブに入りたいのかを決めました。

クイズなどもあって、とても楽しく読みました。ありがとうございました。

5年生の児童は、4年生から届いた手紙を読み、新聞作りを頑張って良かったと感じ、とても嬉しかったようである。

また、4年生は5年生の新聞発表を見て、来年度の新聞作りの参考になり、お互いに良い刺激を受けることができた。

4. 地域資源を活用した学習

総合的な学習の時間や特別活動等の時間に、地域資源を活用した学習を行い、その学習の中でも「学び合う」ことを意図的に行っている。本校は、地域と連携した学習に力を入れており、年間をとおして地域の方々が多く来校し、児童の教育活動の手助けをしてくださっている。

【地域資源を活用した学習の一覧】

学 年	交流内容
1年生	・ 花の育成 ・ 昔遊び ・ ネーチャーゲーム
2年生	・ 野菜作り ・ 折り紙教室 ・ ネーチャーゲーム
3年生	・ 地域学習（私たちのまち） ・ 座間の昔話
4年生	・ 防災学習 ・ 福祉体験
5年生	・ ひまわり栽培 ・ ひまわりの茎を利用した和紙づくり ・ 座間の大仏
6年生	・ 職場体験学習（相武台南商店街などの20事業所）
特別支援学級	・ 農家収穫体験（とうもろこし、さつまいも、米）

(1) 5年生の実践

本校では、地域の方々の助けをかりて、5年生が総合的な学習の時間に「ひまわり」栽培を行っている。「ひまわり」は、座間市の花であり、本校の校歌の歌詞にも入っているとても縁のある花である。

5月に「ひまわり」の種を蒔き、7月には綺麗な花が咲いた。その後、その「ひまわり」の茎を活用し、埼玉県の小川町の伝統工芸士3人から手ほどきを受け、和紙にすることができた。そして、来年度には、鳳を作る計画である。

この一連の学習をとおして、児童は「ひまわり」から和紙を作るだけではなく、ドレッシングや焼き肉のタレ、化粧品などを作れないかと、相武台南口商店街の人々に提案するまでになった。

下に載せた新聞記事は、本校の取り組みの様子を伝えたものである。



◆ 新聞記事

(平成29年5月19日の神奈川新聞より)



◆ ひまわりの種蒔き



◆ 和紙作り



◆ 総合的な学習の時間の発表会

写真の右に写っている帽子をかぶった相武台南口商店街の人は、総合的な学習の時間の発表会にも来校し、児童の発表を熱心に聴き、質問や感想を述べてくださった。

また、前述した異学年交流の一つとして、他の学年の児童もこの発表会に参加し、5年生に対して質問している場面もあった。

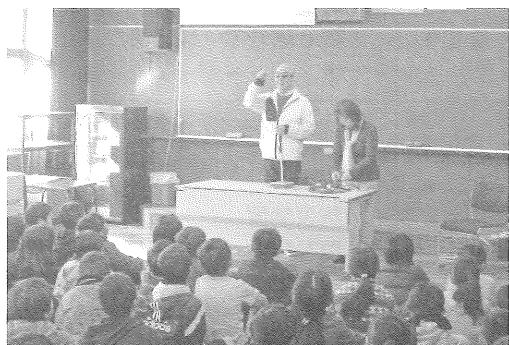
(2) 4年生の実践

次に、4年生の福祉体験について報告をする。本校では、ここ数年4年生が福祉体験を行っている。この福祉体験をとおして、障害を持った方々の思いに寄り添い、自然と障害を持った方々に優しく声を掛けられるようになって欲しいとの願いで、学習を進めている。

今年度も、座間市の手話サークルの方々や本校の卒業生の視覚障害者の方に来校いただき、交流を深めることができた。



◆ 手話体験



◆ 視覚障害者を招いて

福祉学習をとおして、児童は色々な立場の人がいることを知り、どのように対応したら良いのかについて真剣に考えようになった。まだ行動が伴わない児童はいるが、学習する前と比べ、他者に対する配慮は徐々にできるようになっている。そのため、児童の今後の成長が楽しみである。

(3) 2年生の実践

2年生の野菜作りについて報告をする。この野菜作りでは、本校の保護者で農業を行っている方の家に訪問し、直接野菜作りについての説明を聞いた。



◆ 地域の農家訪問

その後、児童は実際に野菜を作り、収穫した野菜を食べ、作物を育てることの喜びを感じることができた。



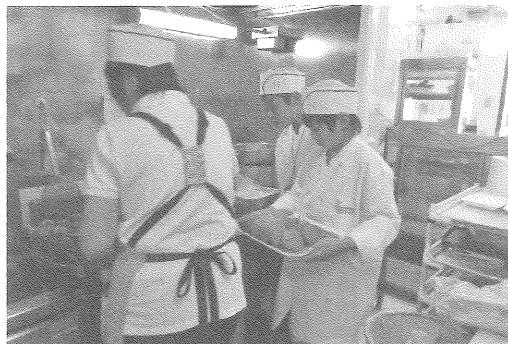
◆ 野菜作り

(4) 6年生の実践

最後に6年生の職業体験学習について、報告する。6年生は、6月23日（金）に相武台南口商店街のお店や学区の会社、幼稚園や保育園の合計20カ所の施設で職業体験を実施させていただくことができた。

この職業体験学習をとおして、児童は将来の職業選択に考えを巡らすことができ、現在勉強していることが社会人になっ

た時にどのように役立つかについて考えるきっかけになっている。そして、地域の方々との交流をとおして以前より社会性が身につき、社会の中の一員であることを意識するようになった。



◆ 肉屋での職業体験



◆ 保育園での職業体験

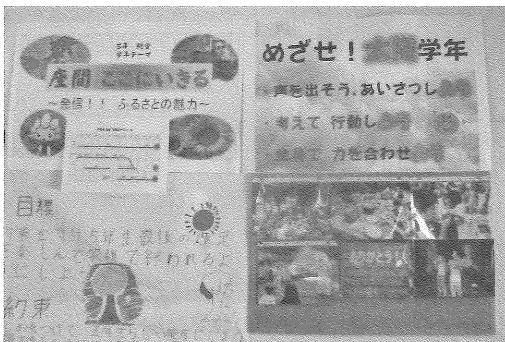
5. 揭示物の工夫

今年度は、日頃の取り組みを視覚化できるように掲示物を多く作成し、階段や廊下に貼りだした。この活動は、昨年度よりも校舎の掲示物を充実させようと教務担当者や校内研究の交流活動部が中心となって呼びかけ、全職員で行ったものである。

工夫した点は、異学年交流の様子や委員会活動の様子、それに学年の取り組みを掲示したことである。この掲示物を見るとどのような交流を行ったのかが一目で分かり、該当した学年だけではなく、他の学年の児

童にも交流した内容が理解できた。

また、保護者をはじめ、来校者からは「掲示物を見ると日頃の活動が分かり、とても良いですね。」や「校舎内に掲示物が多くあり、校舎が明るく感じます。」等のお褒めの言葉をたくさんいただいた。



◆ 学年の取り組みを伝える掲示物

III 成果と課題

1. 成 果

この研究を進めたことにより、多くの成果が表れた。

- 朝会などで全校が集まる時には、しっかりと話を聞くことができており、落ち着いた態度である。
- 授業の基本的な形が確立されてきたので、児童が安心して授業を受けることができている。
- 相談タイムを効果的に導入することで、児童が授業中に自信を持って発表することができた。
- 自分たちから教え合ったり、助け合ったりする姿が見られるようになった。
- 自分たちがまとめたことを積極的に相手に伝える活動になってきた。
- 特別支援学級の児童も、「学び合い」の素地を養うという目標で取り組むこと

ができた。

- 統一した掲示物を作成し、教室に掲示することができた。
- 児童同士が仲良くなり、高学年が低学年に優しく接し、低学年が高学年を頼りにする姿が見られた。
- 昨年度より異学年の交流が増え、休み時間など楽しそうに遊ぶ姿が多く見られた。
- 学級経営の根底に温かい人間関係を築くことができつつある。
- 相手の気持ちが想像できるようになってきた。
- 他者を思いやる気持ちが、徐々に高まっている。
- 地域資源を積極的に活用したことにより、具体的な活動や体験を多く行うことができる、児童の思考が広がりつつある。
- 校舎内の掲示物が充実し、互いの活動の様子が明らかになり、良い刺激を受けている。など

その他、保護者アンケートからもとても嬉しい結果が表れており、保護者の方が本校の取り組みを肯定的に受け止めていることが分かる。

【保護者アンケート結果】

質問内容	年度	計
心豊かな子どもを育てるために心の教育を行っていますか	H 2 7	7 0
	H 2 8	8 2
	H 2 9	8 5
授業はわかりやすく充実していると思いますか	H 2 7	7 6
	H 2 8	8 1
	H 2 9	8 2

質問内容	年度	計
教職員は、児童一人ひとりを大切にしていると思いますか	H 27	8 3
	H 28	8 7
	H 29	9 0
保護者や地域の方々との連携を重視した教育を行っていると思いますか	H 27	8 1
	H 28	8 4
	H 29	8 8

2. 課題

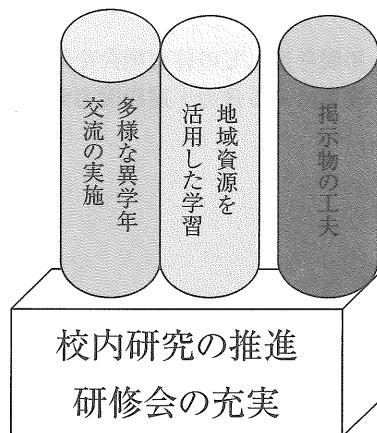
- 課題は、以下のとおりである。
- 常に教えてもらうのを待っている児童や自分の考えを伝えることに苦手意識を持っている児童への手立てを考えていく必要がある。
 - 自分から意欲的に学ぼうとしない児童への支援が難しい。
 - 学習課題から学習問題を引き出すための教材研究や児童への言葉かけなど、もっと研究する必要がある。
 - 「学び合い」を深めるための発問の工夫や教師の手立てについて研究する。
 - 課題を多く与えてしまい、授業のポイントとなるところがおろそかになってしまった。
 - 掲示物を作成し教室に掲示することができたが、まだ児童はその掲示物の内容を意識できていない面がある。そのため、担任が児童に対して授業の中でもっと意識させる必要がある。
 - 昨年度より異学年交流は活発に行えたが、学年によって1年間をとおして交流が継続できないこともあった。
 - 進んで異学年交流をすることができるな

い児童への支援が課題である。

- 教員対児童の関係だけではなく、児童同士の関係を深めるための言葉かけや教員の手立てを研究する必要がある。
- 児童は、自分の考えを自分の言葉で表現することに苦手意識がある。

3. まとめ

本校の研究は、校内研究会と研修会で職員の共通意識を高め、それを土台にして授業改善だけではなく、下図のように3つの取り組みを行った。



私は、研究テーマの「心豊かに生き生きと活動する子」とは、『他者のことを思いやりながら活動できる子』ととらえ、児童の姿を見てきた。

児童は、多くの実践をとおして、他者の気持ちに寄り添いながら活動できるようになっているが、まだまだ発展途上である。

そのため、この研究は来年度も継続して行い、テーマに掲げる児童の育成に向けて、職員が一丸となって力を注ぐつもりである。

(校長：金子憲勝)